

# 相模原障害者殺傷事件から3年

—— 生命の重みを問い、支援と人権を考える岡山集会 ——

## 開催主意書

あの日から3年が過ぎました。2016年7月26日未明に起きた障害者支援施設での「障害」者殺戮(さつりく)は、日本を震撼(しんかん)させました。19名の生命が奪われ、27名の身体が痛めつけられたのです。殺戮者はこの施設に5ヶ月前まで、生活支援員として働いていた27歳(当時)の男性職員でした。なぜ。3年経った今も、この“なぜ”への答えは見つかっていません。その最大の“なぜ”は、「障害」者施設で働いていた職員が、同じ施設の利用者を殺害してしまうに至った経緯と背景なのです。「障害」ある人たちの為に自らの力を使いたいと決意し施設に就職した若者が、3年後には「障害者は周りを不幸にする存在」「生きる価値のないひとたち」という価値観を身に着け、ホロコーストともいえる行為へと走るに至ったのか。普通に考えれば、「障害」ある人のことを一番理解しているはずの職員がやらかす行為ではない、と誰もが思ったはずです。誰もが理解に苦しむその謎が解明できなければ、またいつか必ず、第二第三の植松が施設から生まれることを否定できないのです。

事件後、3つの報告書が公表されました。2016年9月に「中間まとめ～事件の検証を中心として～」、同11月に「津久井やまゆり園事件検証報告書」、同12月に「再発防止策の提言」がそれぞれ、国、県より出されましたが、どの報告書にも、強制入院や退院後支援等の精神医療のあり方、警察と行政の連携不足、防犯カメラ導入などの不審者対策、優性思想云々には触れても、施設責任の根幹を問う文章は見当たりません。施設の責任とは、情報共有のなさや夜間職員体制の強化、危機管理意識の低下などといった枝葉末節(しょうまつせつ)的な課題ではなく、「障害」あるひとたちの人生を引き受ける「職員(ひと)を育てる」という究極的な課題に、施設はどう取り組んできたのかという責任です。

「津久井やまゆり園は、働きやすいところでした。例えば、見守りという仕事があるのですが、本当に見ているだけですから」「(職員の)言うことを聞いてくれない障害者もいますが、暴れたら押さえつけるだけですから」「仕事自体に疑問を感じたことは全くありません。ただ彼らを見ているうちに、いつからというわけでもなく、生きていく意味があるのかと思うようになったのです」。植松被告は、「大事」なことを語っています。環境がひとを育てもするし潰(つぶ)しもする。何の疑問も持たず仕事をこなすだけの毎日を繰り返せば、ひとは「いつからというわけでもなく」相手を見下し差別する。そこに、その感情や意識を強化する情報が加わればどうなるのか。例えばナチスのT4作戦、例えばIS、例えばトランプ演説、例えばヘイトスピーチ。彼は、いつからというわけでもなく、「役立たずや異物は死あるのみ」という考えに行きついたのでした。もし、植松被告の働いた施設が、「ただ見ているだけ

の」「暴れたら押さえつけるだけの」対応を許さない環境であったなら、彼はこのような行為に至ったのであろうか、と考えると施設で働く人間として、居ても立っても居られない気持ちになり、事件3年目の企画として、「施設の責任を考える集い」を思いついたのです。この事件は、理想主義を否定し、思いついたことは何を言っても、何をやってもいいんだ、という独善主義を突き付けました。この事件は、まさにパンドラの箱を開けてしまったのかもしれませんが。私たちはこの集いを、福祉の理想主義たる原点に立ち返り、この事件の本質的検証を試みる場にしたいと考えます。

わたしたちは、本集会の趣旨に賛同し、開催を応援します。  
ぜひとも多くの方の参加をお願いいたします。

発 起 人 一 覧 (順不同)

社会福祉法人 弘徳学園 統括施設長 重利 政志  
岡山県精神障害者社会福祉事業者協議会 会長 片山 健  
岡山県知的障害者福祉協会 会長 五代儀 幸司  
岡山県就労移行支援事業所協議会 会長 大谷 俊之  
岡山県相談支援専門員協会 副会長 村上 眞  
美作大学 社会福祉学科 准教授 薬師寺 明子  
社会福祉法人 旭川荘 デイセンターあかしや サービス管理責任者 寺町清二  
社会福祉法人 ももぞの学園 法人本部 統括施設長 片山 泰伸  
社会福祉法人 弘徳学園 相談支援センターあしすと 管理者 岡 誠  
社会福祉法人 めやす箱 倉敷西部地域生活支援センター 管理者 中尾 浩二郎  
社会福祉法人 中野福祉協会 ひだまりいろ 管理者 森史子